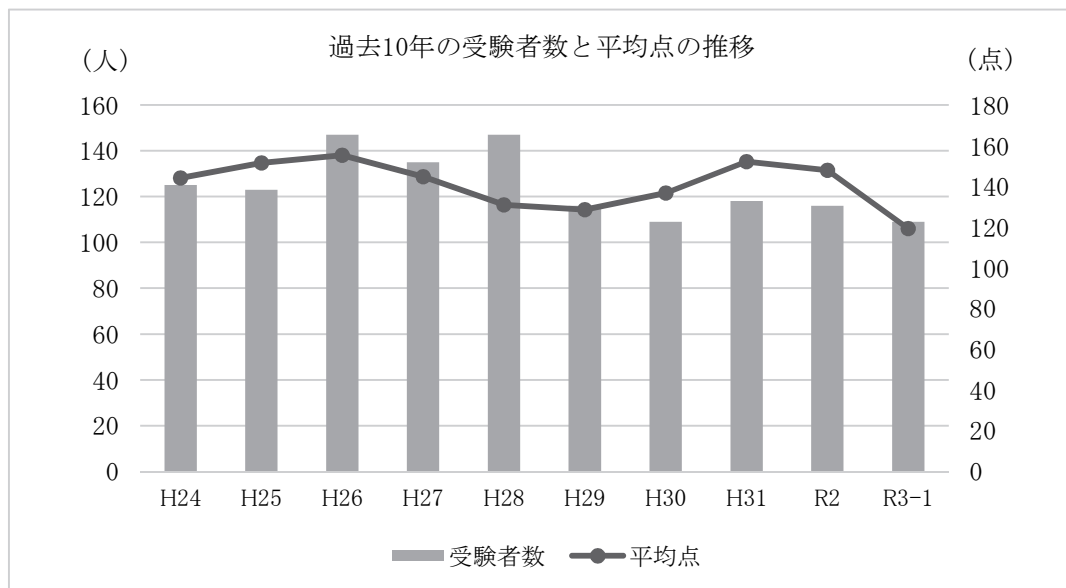


# ドイツ語

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

### 1 前 文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の第1回が実施され、受験者数109名、平均点119.25点であった。「ドイツ語」では「英語」と異なり試行調査が存在せず、新しい試験に関する情報が全くない中でどれくらいの受験者がいるのか予想がつかず不安に思っていたが、100名以上が「ドイツ語」に挑戦したことにひとまず安堵した。



「英語（リーディング）」の平均点と比較すると同程度であったことや、語彙数が大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）より増えたことは受験者にとって想定外であり、難化した印象を受けたのではないだろうか。その結果を受けて、次年度以降の「ドイツ語」の受験者が減らないことを祈るばかりである。

### 2 内容・範囲

全体の構成は大問7つ、設問数はセンター試験より1問増えて51問、文法、対話、広告文、物語、特定のテーマ下での長文など、受験者には幅広い学習が求められる出題構成であった。

第1問 発音やアクセント、動詞や複数形のつくり方など基本的な知識を問う出題。

問1 jの発音を問う出題。慣れ親しんだ語が多く、受験者には解きやすかったのではないか。

問2 母音の長短を問う出題。選択肢に挙げられた語は全て基本的な語彙である。選択肢は見慣れた語彙ではあるが、母音の長短まで意識していない受験者が多かったのではないか。

問3 共通する語頭のつづりを持つ2つの語のアクセントを問う出題。選択肢に難語はないが、法則性で類推できる訳でもない。

問4 不規則動詞の人称変化を問う基本的な出題。

問5 動詞の過去基本形を問う基本的な出題。授業で過去形が扱われる機会が減っているが、受験者には知っていてほしい知識である。

問6 いわゆる-e型の複数で母音が変音するかどうかを問う出題。選択肢に挙げられた語の難易

度は適切だと考えるが、挙げられた語は全て一音節であり、「母音」という用語を受験者が理解していない前提であれば、「下線部」で事足りるのかもしれない。

問7 特定のテーマに属さない語を探す。正答③は分かるであろうが、①Waffelはなじみがないと思われる。②Friseurは、教科書によっては「職業」の語彙を学習する時には出てこない可能性がある。

第2問 文法的な知識が問われている。所有冠詞、再帰動詞、副文など広範囲から出題され、豊富な学習量が要求されている。

問1 所有冠詞ihrの変化を問う出題。jm. zuhören という表現は目にしたことがあるが、動詞の格支配まで意識できる受験者は多くないに違いない。

問2 sich<sup>4</sup> um et<sup>4</sup> bewerben という基本的な再帰表現で用いる再帰代名詞を問う出題。

問3 関係副詞を答える。先行詞がden Ortであることに受験者は気付かないかもしれない。

問4 文法的知識ではなく、am Fuß liegen という表現を知っているかどうか問われている。

難問。表現を目にしたことはなくとも、前置詞の意味と、設問にある語から状況をイメージできれば正答に至ることができるかもしれない。

問5 不定詞を取る動詞あるいは助動詞を探すことができるか。基本的な文法の出題である。

問6 zu不定詞を取る動詞④を選ぶ出題。迷う要素は少ない。

問7 後半の文が副文になっていることから従属接続詞を入れることが分かり、文意から②を選択する。

問8 etwas＋名詞化された形容詞。形容詞の名詞化について扱わない教科書も散見される中、形容詞の学習をどこまで進めたかがポイントになる。

第3問 文法の知識を利用し、構文に合わせて選択肢を並べ替えることで文を完成させる。センター試験でも取り入れられた出題形式であるが、共通テストでは与えられた選択肢に不要なものが一つ含まれることで解きにくくなり、全体的に難度が高くなっている。

問1 前置詞を伴う関係代名詞に導かれる副文の並び替え。やや難。

問2 相関的接続詞を含む文。weder … noch …と間違えて並び替えた受験者もいたかもしれない。

問3 非現実話法の過去。非現実話法の表現としてwürde…不定詞に慣れ親しんでいるからか、①würdeに惑わされたようだ。非現実話法の現在では学ぶが、fast「あやうく」等の表現を含む非現実過去まで学ぶ受験者はそう多くはない。

問4 助動詞を含む主文＋副詞的接続詞を含む主文の語順を問う。出題は妥当であるが、訂正の内容が、必要な語の選択に影響を与えた可能性も否定できない。

問5 助動詞を含む文の語順、副文内のsichの位置を問う。消去法でsichの位置は確定するだろうが、sichの位置について授業で詳しく取り上げられる機会は多くなく、このような文法項目まで求められることに対し受験者も教える側も不安を感じる。

第4問 一連の比較的長い対話を読み、設問に答える。使用語数が多く、読み解くのに時間を要する。出題は3つに分かれているが、対話は4部からなっている。1部は親友TimoとMaxの対話、2部は試合後のMaxとサッカーコーチの対話、3部は帰り道のTimoとMaxの対話、4部はTimoと父親の対話となっている。

問1 形容詞の意味を捉え状況を考える。Ⓐで「今日はかなり暖かく」、Ⓑで「午後から寒くなる」ことが分かるか。気温差がある①を選ぶ。Es ist warm. という表現は授業で学ぶだろうが、schön warmという口語的な表現を学ぶ機会があるか疑問である。

問2 MaxのセリフのGewitterとmitbringenから類推し、①を選ぶ。

- 問3 **28**の前後のTimoのセリフから、ネガティブな気持ちを感じ取れるか。
- 問4 1つ前のMaxとTimoのやり取りから、励まそうとしていることが取れるか。対話表現になじみがない受験者には難しく感じた場合もあったのではないか。他の選択肢も、ネイティブが会話で多用する表現ばかりであり、語彙や文法の知識だけでは解きづらいかもしれない。
- 問5 dochや⑩の前にあるAberからFrau Jakobsの発言には同意できないということが読み取れるか。
- 問6 Maxの気持ちを読み取る出題。挙げられた項目同士を組み合わせなければならないので、正答には至るだろうが、日本語で書かれている行為・考えが本文から読み取れると言われると、疑問が残る。
- 問7 **32**の直前の「(小さな声で) うん、2対1」を読み取り、Maxがその後も、後ろ向きな発言をしていることから、「(勝ったのに) 嬉しくないのか?」という父親からの疑問を入れる。選択肢にある感情を表す動詞もさほど難しくはない。
- 問8 設問には「父親が言おうとしている」とあるが、正答①は実際に父親が③で言っているセリフの意味ではないか。
- 第5問 犬を飼いたい2人の対話文とネットにある犬を飼いたい人の為のチェックリストからの出題。対話とチェックリストを参考にする場面があるので両方の理解が必要である。
- 問1 sich<sup>3</sup> etwas leistenの言い換えを答えるが、leisten自体が受験者にとって難しい動詞である。表現を知らなければ言い換えはできないので、瞬時に消去法で判断することは難しい。チェックリストの項目と対話文で述べられている内容とを照らし合わせると、対話にあるGeld「お金」の話題がチェックリストの3と対応していることから判断はもしかすると可能かもしれない。よく練られた出題であるが、この1つの出題に対し、そこまでの時間を割くことが受験者ではできるのだろうかという疑問は残る。
- 問2 相関的接続詞を問う出題。さほど難しくはない。「稼ぎは悪くないが、生活スタイルを変える必要がある」と**a**と**b**の後で反対のことを言いたいということがとれるか。
- 問3 犬のいる生活スタイルにする1つの結果として、旅行や出かけることがあまりできなくなることに対する応答。bereitやwäreを用いた表現は主に「耳にする」語彙であり、教科書から学ぶ機会は少ないのではないか。
- 問4 ⑦daの示す場所を選ぶ。zu Hauseが選択肢にないので、消去法で②のbei dem Hundに行きつくが、家でないことに違和感があった。
- 問5 チェックリストから2つを選ぶ出題。チェックリストを丁寧に読み込めていないと正答にたどり着けない。対話文のklärenの意味や、leistenやumgehen等チェックリストの語句が難しく、2つ選ぶのは困難だろう。
- 問6 対話を理解した上で、答える出題。選択肢のドイツ語自体は、そこまで難しくはなく、よく考えられている印象であるが、本文の理解が十分でなく、正答にたどりつけなかった受験者が多かったのではないか。
- 第6問 魚の王様と漁師との物語からの出題。ドイツ語の場合、物語では過去形が多用され、物語特有の表現を知っていなければならない。近年では、過去形や過去完了で書かれた物語や記事を授業で扱うことは減ってきており、読みなれない受験者がいたかもしれない。
- 問1 物語の流れと、実際に文章に出現する順番とが一致していないことに注意し、時系列に沿って並べる。
- 問2 魚の様子を選ぶ。本文の下に絵もあり、よく読めばさほど難しくはない。
- 問3 漁師が魚を解放した理由を選ぶ。本文中のMitleidと②leidが対応していることが分かるか。

問4 物語の内容理解。正答②は、主人公の魚・漁師ではなく、話の流れの中でごく簡単に触れられただけの医者に関する記述であり、少し拍子抜けした。

第7問 父母が異なる母語を話す子どもに関して、主に父親の考えが書かれた長文。多言語に接しながら成長する子どもの言語習得に関する過去の研究についても触れている。日本語でも記事の内容紹介があり、語彙や表現にも難しいものさほどはない。問1～6まで独問独答である。本文と設問を十分に読み込む時間を確保できれば、さほど難しくはない。

問1 Lisaが父親と話す言語（父親の母語）を答える。1段落目6行目に言及されている。

問2 多言語に接しながら成長することについて、本文（2段落目）でどのように言及されているのか選択する。

問3 本文を理解できていれば正答（4段落目）はすぐに選択できる。正答であるかどうか確認するために、①～④の選択肢にある文は全て読む必要がある。

問4 Lisaが父親と過ごす時間が長い理由を選択（3段落目）する。注の語彙もあり選択の補助となっている。

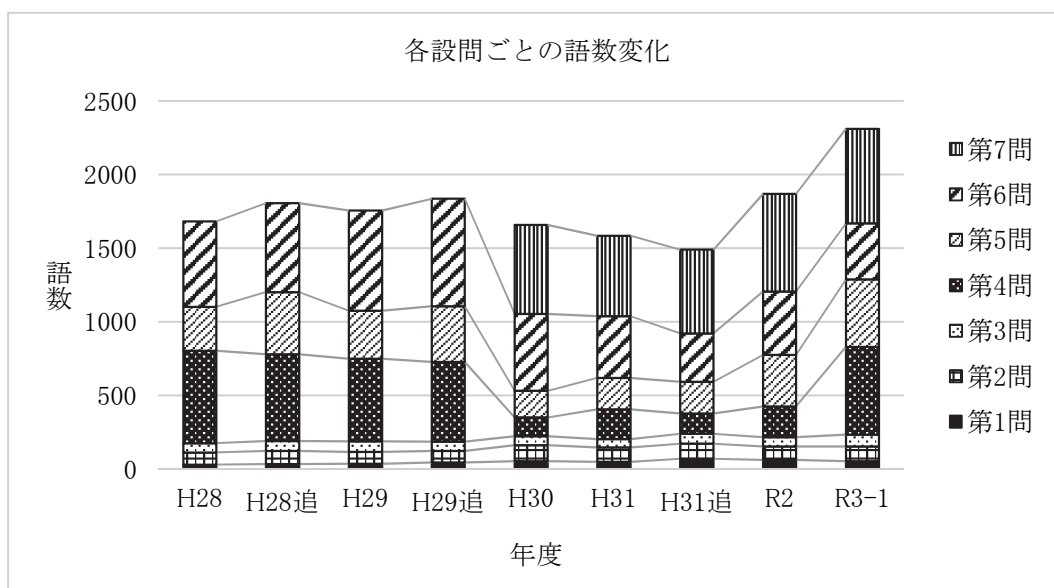
問5 設問中のAnsichtが分かるか。分からない場合でも設問の内容を読めば正答を選択可。

問6 第5問に出てきたmit<sup>3</sup> umgehen が選択肢に含まれ、正答となっている。

問7 本文をしっかり読んでいれば、迷う要素は少ないと思われる。ただし、日本語だけを頼りに解答した受験者もいたのではない。

### 3 分量・程度

センター試験の時と比較すると、図に示したように、語彙数が前年比約1.2倍、一昨年比約1.5倍と増加しているが、設問数は1問しか増えていない。試験時間は80分と変化がない中で、1.2～1.5倍のドイツ語文を読みこなさねばならない。第3問では使われない選択肢が増え、迷う要素が増えたことも加わり、受験者にとっては大きな負担だったようだ。その増えた語句は、独問独答に充てられ、本文だけでなく設問やその選択肢も読み込む必要があり、特に第4問では語彙数が格段に増えており、センター試験と同じ時間配分を考えていた場合、受験者が戸惑うことは想像に難くない。



また、「ドイツ語」では「英語」と異なり試行調査が存在せず、新しい試験に関する情報が全くない中で、語彙数がこれだけ増えるのは受験者にとって想定外で、どう時間を配分したらいいのかわからなかったに違いない。試験時間内に全ての設問に目を通すことは可能かもしれないが、思考力

を出題の中で求めるのであれば熟考する時間はある程度必要であろう。

#### 4 表現・形式

センター試験と共通テストは異なる試験であることは分かるが、形式（特に第4問）が大きく変更になり、設問数に対して読む量が格段に増えた点は、受験者に大きな衝撃を与えたと思われる。加えて、「ドイツ語」の総設問数は51であったが、「フランス語」は50、「中国語」は52、「韓国語」は46であった。総得点と試験時間は統一されているが、内容によって設問数の設定が各言語でできるようになったと思われる。令和4年度以降の受験者や教える側は、試験の形式が維持されるのか、そして設問数が大きく増減するのか気になるところであろう。「ドイツ語」には予備校や塾が全国規模で実施する模擬試験は存在しないため、「英語」のように、共通テストで扱われる・扱われない項目の目安が示されるだけでも、受験者は安心して勉強に集中することができるだろう。

今年度の共通テストでは、幅広い文法・語彙の知識から、こなれた口語表現まで、より幅広い知識が求められている印象を受けた。特に、口語表現は、ALT（ドイツ母語話者の補助教員）との授業経験や、ネイティブとの会話経験の有無に左右されることも多く、教科書を純粹に学習しているだけではカバーできない出題が多々あった。学習時にネイティブと接することができる機会を確保できない学校や受験者もいる中、共通テスト(1)の試験問題において、口語表現の意味を踏まえて場面に適しているか判断させる出題が散見された点が気になった。

また、過去形を用いた物語文を読む機会はほとんどなく、以前より読みにくいと感じる受験者が少なくなかったのではないか。特にコミュニケーションベースの教科書では、扱う過去形に限りがあり、全体が過去形を中心に書かれている文章で学ぶ機会は少なくなり、より日常生活に密着した語句を学ぶことに重点が置かれている。そして、日常生活に密着した語句を学ぶ場合、以前の教科書と比較して扱われる文法が限定的となる代わりに、学ぶ語句が一つのテーマに対し膨大になっている。

共通テスト「ドイツ語」にはリスニングの設定がなく、受験者にアクセントや母音の長短への意識を持たせるためにも、アクセントや母音についての出題を維持してほしい。

「思考力」「判断力」を問うことを共通テストでは意識しているのかもしれないが、記述式の出題がない中で、それらの能力を問うには限界があると感じている。今回の共通テストにも出題があったが、本文に書かれていないことに対し、想像力を働かせ、発話者の意図を汲み取り、与えられた選択肢の中から正答として最適と考えられるものを一つ選ぶことが、果たして入試で問おうとしている「思考力」「判断力」なのは大いに疑問が残った。

#### 5 ま と め

第1回共通テスト(1)の試験について、幾つかの観点から意見を述べはしたが、「英語」とは違い「ドイツ語」の学習環境は多種多様であり一般化することができない中で、高校の現状を鑑みて「ドイツ語」の問題作成に多くの時間と労力を割いていただいている問題作成委員の方々に心から感謝申し上げます。

令和4年度実施の新高等学校学習指導要領に向けて教育課程の編成が各校で始まっている。国語や地理歴史、公民の必修科目の増加に伴い、ドイツ語を含む第二外国語の授業時間の確保がより難しくなることが予想される。そのような厳しい環境の中で、英語以外の外国語に積極的に取り組み、意欲的に学習する生徒の頑張りが測れるような共通テストのような枠組みが維持されることを切に願っている。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響もあり、日本社会が抱える問題が様々な形で噴出

している。多様な価値観を理解，尊重し，よりよい社会にしていくために，生徒たちには画一的ではない，多角的で柔軟なものを見方をし，新たな発想をしていくことが求められている。英語以外の外国語を学ぶ生徒が留学や語学研修に行った際に，同じ世代の高校生たちが英語やフランス語，その他の外国語を当たり前のように複数学んでいる状況を目の当たりにして帰ってくる。そのような自分とは異なる環境や文化に身を置き，自分の中の「当たり前」に気づき，違う視点を持つことが，多角的な視野を持つ一助となっていくと考えている。

しかしながら，日本では英語の学習のみが外国語の中で重要視され，日本語と英語からの情報しか手にできない状況が加速度的に進んでいる。英語偏重の教育から脱却できない，あるいは推し進めようとしている日本の学校制度に対し，英語以外の言語を教える立場としては，日本の行く末に対し危機感を抱いている。

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 日本独文学会 ドイツ語教育部会

(代表者 太田 達也 会員数 約550名)

TEL 03-5950-1147

#### 1 前 文

高等教育における外国語としての「ドイツ語」教育は、それぞれの高等学校が置かれている状況に応じて授業時間数やカリキュラムなどが決められており、現在ではドイツ語に特化した学習指導要領はない。本報告では、今年度より始まった大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の「ドイツ語」の問題が、高等学校のドイツ語教育に求められ得るドイツ語の基礎学力を測り、大学教育を受けるにふさわしい能力を判断する設問になっているかを総合的に評価する。

令和3年度共通テスト(1)における「ドイツ語」受験者は、109人であった。これは、昨年度の大学入試センター試験本試験の受験者数である116人に比べるとやや少ない。平均点は119.25点（100点満点換算値：59.62点）であった。最高点は200点（同：100点）、最低点は14点（同：7点）であった。これは「英語（リーディング）」（平均点：58.80点）と同水準であると言える。

今年度は、次節で述べるように、問題傾向が大きく変わっている。また、昨年度より難度は上がっているが、今年度は登場人物の心情を読む問題や、表現の言い換えなど、実際のコミュニケーションで必要とされる知識やスキルも問われており、時代に即した工夫がされていると言えよう。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

今年度も、昨年度と同じく、大問の数が7つという大きな構成はそのまま継承されているが、第4問以降の構成や出題形式は大きく変わったと言ってよい。なお、設問数は、昨年度が49であったのに対し、今年度は51であった。第1問～第3問は、全問題数の49%を占め、配点は全体の35%である。ここで問われているのは、基礎的な発音に関する知識と文法の理解であり、昨年度までと変わりはない。第4問は、昨年度は4問構成であったが、今年度は8問と倍増し、配点も全体の20%を占めている。また平成30年度までの第6問のように、まとまった量のテキストを、順を追って読み進める必要があり、解答する時間配分にも気をつける必要がある。第5問は、会話文の問題で、形式こそ昨年度と同じであるが、問題数は6問（昨年度4問）と増えている。また、設問も、表現の言い換えや、組合せを問う問題など、難度が上がっている。配点は、全体の15%である。第6問は、平成31年度と令和2年度の試験では、SNSやポスターなどの補足情報を用いた形式で、レストランでの会話や見たい映画を決める会話など、受験者も追体験できるような現実世界の話であった。それに対して今年度は「奇跡を起こせる魚の王様」が出てくる童話風の物語になったことで、文章を読み解く力がより一層問われ、解答のための所要時間も増えたと思われる。また、5択や6択問題も織り交ぜられているのが特徴と言える。設問数は、昨年度の6問から、今年度は5問に減っている。配点は25点で、全体の13%である。第7問は、問題数が7、配点は18%と、昨年度（問題数10、配点30%）と比べるとスリム化された。ただし、出題内容は、昨年度は例えば状況に合う人物を選んだり、文章にふさわしいタイトルを選んだりするなど、比較的易しい問題であったが、今年度は設問が減り、内容把握の問いが多かった。選択肢のドイツ語もしっかりと読む必要がある。

ドイツ語総語数は2,144語で昨年度より330語増えている。総語彙数は、614語で昨年度より13語増えているが、水準としては昨年度とほぼ同等である。本評価で使用している過去の出題語彙データ

ベースに蓄積している語、一般的な独和辞典（見出し語6～8万語程度）で基礎語彙として扱われている語、基礎語彙を組み合わせた合成語、固有名詞、国際語、注付きの語、派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと、やや難度が高いと思われる語の数は13語であった（★）。なお、この13語は、一般的な独和辞典において、いずれも見出し語としては掲げられている。★ erlernen, Hubschrauber, Keks, liebste, missmutig, normalerweise, Oma, realistisch, sicherlich, überglücklich, Waffel, weitaus, zurzeit

本評価書では、平成30年度より、ドイツのゲーテ・インスティトゥートがヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）に基づいて作成・公表しているドイツ語B1レベル語彙リストに含まれるかどうかを調べている。これは、受験者が単語を学習するときの国際的な指針となるものである。上記13語のうち4語（liebste, normalerweise, Oma, realistisch）はこのB1語彙リストに含まれていた。実質的な難語といえる9語（昨年度に難語とされた数は11語であった）の中でも、sicherlichやüberglücklichについては、基底語sicherやglücklichが基礎語彙である。しかし、über-が多義的であるため、überglücklichの意味を推し量るのはやや難度が高い。名詞Hubschrauber, Keks, Waffelは、出題されていたのが「語の意味によるグループ分け」を問う問題（第1問、問7）であったため、グループからの類推は働いたかもしれないが、難語である以上、単体での意味を想像することは難しいと考えられる。とりわけWaffelは選択肢として挙げられている。選択肢に用いる語は、CEFRのB1リストに掲載されているものから選ぶなど、今後工夫が必要かもしれない。

第1問 設問数（7）、頁数（2）、配点（21）は昨年度と同様であり、発音に関する小問3題、文法に関する小問3題、意味に基づき名詞を分類する小問1題から構成されている。重要な基本事項の理解度を確認する上で、総じてよく練られた問題である。

問1 子音jの発音が、有声・無声のいずれかを問う問題である。基本的な語彙が選択肢として挙げられている。有声の摩擦音[ɰ]で発音する国際語としてJournalistを採用したと推測するが、妥当な判断と思われる。

問2 母音oの長短を問う問題である。子音連鎖の前は短母音になるという基本的なルールにより、Holzだけが短母音になることを問う良問である。Mondのような例外があることも示唆している。

問3 複合語、動詞から派生した名詞、外来語由来の語などでアクセントの位置が異なることを問う良問である。

問5 過去形にしたときに、幹母音が変わる動詞に関する知識を問う基本的な問題である。不規則動詞を見極める必要もあり、難度は妥当である。

問6 名詞を複数形にしたときに、母音が変音しない名詞を問う問題である。複数形の語尾が-e型の名詞の場合は、母音が変音する語としない語があるため、語彙に関する個別の知識が必要となる。難度はやや高い。

問7 グループに分類された名詞に対し、選択肢の中からそれらに属さない名詞を選ぶ、工夫された良問である。

第2問 設問数（8）、配点（24）、出題形式のいずれも昨年度と同様である。基本的な文法や語彙、熟語的表現の知識を問っている。主に日常的な場面で使用頻度の高い発話を扱いながら、幅広い文法項目がバランスよく盛り込まれ、全体としての難度も適切である。

問1 単数形・複数形の知識、動詞の格支配を同時に問う良問である。難度は高い。

問2 bewerbenと結びつく適切な再帰代名詞を選択させる問題である。

問5 使役動詞を選択させる問題である。文意とfahrenが不定形となる枠構造に照らして正解に導くことになる。



- 問6 brauchen+zu不定詞の用法を問う問題である。前後関係がうまく工夫されているが、その文の意味を理解していなくても正解を選択することもできる。
- 問7 文意を的確に捉えられれば、適切な従属接続詞を選ぶことができるが、難度は高い。
- 問8 etwas+形容詞の名詞化の知識と格変化語尾を問う基本的な問題である。
- 第3問 設問数(5)、配点(25)は同様だが、出題形式に若干の変更が加えられた。昨年度は選択肢の語・語句全てを用いて文を完成させたが、今回は6つの選択肢から5つを選び空欄を補う形式となった。この形式もうまく生かされた設問であり、評価できる。また、ドイツ語圏の日常に即したテーマを入れるなどの工夫も見られる。1つの空欄に対して2語以上から成る選択肢は、昨年度が9つであったのに対し、今年度は2つであった。
- 問1 前置詞付き関係代名詞を用いた文を正しい語順で作れるかを問う良問である。
- 問3 接続法過去の用法に関する知識を問う、やや難しい問題である。
- 問4 分離動詞と熟語的表現の理解を広く問う良問である。
- 問5 wissenとkennenの意味の別、再帰代名詞の位置、副文の語順、熟語的表現を総合的に問う良問であるが、難度は高い。
- 第4問 設問数(8)、配点(40)は、いずれも昨年度の2倍で、連続性のある比較的長い3つのダイアログの内容理解を問う形式に大幅に変わった。トピックはドイツ語圏のサッカー少年のある一日における様々なやりとりについてである。3つのテキストは連続性があるものの、サッカーの試合前、試合直後、自宅と場面が変わり、登場人物にも変化があることから、一連のストーリーの流れをおさえ、かつ場面ごとに状況を把握する必要がある。ひとつめのダイアログに関する設問は4つ、その他は各2つである。少年たちが所属するチームのコーチが女性であることに、ドイツ社会におけるジェンダー意識を垣間見ることができ、興味深い。
- 問3 Timoの心情を問うている。前後の会話の流れを把握する必要のある良問である。
- 問4 各選択肢の意味に加えて、MaxがTimoの試合出場をどう考えているのかを汲み取る問題である。文末にある感嘆符や、後続の会話も手がかりになるが、直後にTimoの反応があるべきだったのではないか。選択肢の表現も含め、難しい問題である。
- 問5 心態詞dochの用法の知識を問う問題である。登場人物の心情も意識しながら読む必要があり、興味深い。
- 問6 ふたつめのダイアログの理解度を測る良い問題であるが、設問の理解も含め、難度が高く、時間もかかるため、配点や出題形式に工夫があってもよいのではないか。
- 問7 各選択肢中の動詞の意味とダイアログの状況理解が求められる問題である。
- 問8 設問では「父親が言おうとしていることは何か」とあるが、選択肢は下線部の逐語訳を問うものになっている。sich zurückhaltenか主文の意味が分かれば正解できる。
- 第5問 設問数(6)、配点(30)ともに昨年度より増加している。テキストの種類は、犬を飼い始めようとするLunaとJanの間で行われる会話に加え、犬の飼育に関するインターネットからの情報として、短いテキストが挿入されている。設問数、配点及び2種類の異なるタイプのテキストで構成されている点に加え、テキストの分量も昨年度の第6問とほぼ同等である。会話の内容や流れは、ドイツ語圏での実生活を意識している点が目を引く。様々な慣用表現に関する知識と会話の流れを正確に把握する能力が試される設問が多い。
- 問1 慣用表現sich et. leisten könnenの意味を問うている。この文について話し合っているテキスト本文が助けになるものの、この表現自体は難度が高い。
- 問4 daのこのテキストにおける意味を問うている。直前の会話内容を正確に理解できているかが重要になる、良問である。

問5 会話の中で解決できなかった点を、挿入テキストから選ぶ問題である。会話テキスト全体と、動詞klärenの意味を理解している必要がある。またwenn文では未来の事柄を完了形で表しており、難度は高い。

問6 テキスト全体の理解に関わる問題であり、同時に選択肢に使われている表現も正確に理解する必要がある。良問である。

第6問 設問数(4)、配点(25)ともに昨年度より減少し、昨年度の第5問とほぼ同等である。しかし昨年度の問5と比較すると、語数が約190から260へと大きく増加している。童話というテキストの種類も、過去数年にはなかった特徴である。第4問や第5問のような、日常生活に直接関連したテキストと違い、非日常である童話は、話の展開の予測がつきにくく、各文とそれらのつながりをより正確に把握しながら読む必要がある。そのため、全体的に難度がやや高く感じられる。語注を付ける、より分かりやすい語彙や表現を増やすなどの工夫があれば、スムーズに読むことができると思われる。

問1 テキストの内容を表した6つの文を、話の順序通りに並べ替える問題で、テキストの大きな流れを把握する力に加え、選択肢の内容を時系列に再構成する必要があり、問1で問うには難度が非常に高い。

問2 Fischkönigの容姿を正しく描写した文を選ぶ問題で、テキストのより詳細な理解と、関係代名詞による描写表現が正しく理解できるかが重要である。

問3 漁師がFischkönigを逃がした理由として正しいものを選ぶ問題である。本文に出てくるMitleid mit *jm.* bekommenという表現が、②の*jm.* leid tunに相当することが分かるかが、正解への鍵となる。

問4 5つの日本語文の中から、テキストの内容に合うものを1つ選ぶ問題である。テキスト中盤部分のFischkönigと漁師のやり取りを正確に理解していれば正解できるが、各選択肢について、テキスト内容をかなり詳細に理解していなければ、正解に迷う。読む量が多いのに対し、正解が個々の文の理解に左右される印象が強い。

第7問 頁数(4)、配点(35)、設問数は7問で、昨年度に比べて設問数及び配点が減った。本文33行、総語数は398語で、ドイツの多言語環境における子どもの言語習得を主なテーマとした5つの段落で構成されている。主人公Lisaを取り巻く言語環境に関する記述がなされ、次に育児休暇を取ったLisaの父親が、娘とのコミュニケーションや就学後の日本語教育について考えを述べている。Lisaの両親は多言語環境での子育てをポジティブに捉えており、将来を見据えた多言語主義の重要性についても触れている。テーマは受験生にとって身近ではない可能性もあるが、ヨーロッパにおける多言語主義の重要性を示し、ドイツ語学習の意義にも深く関わる興味深いテキストである。

問1 Lisaと父親の間で使用する言語を尋ねる問題である。第1・第3段落で言及されており、難度は高くない。

問2 言語発達に関するひと昔前までの見解を、テキスト中から読み解く問題であるが、本文中のbegabtの意味が分からないと、解答に迷う可能性がある。

問3 第3・第4段落における父親に関する記述内容を理解できていれば答えられる。個々の選択肢は明確であり、迷わせるような選択肢もない。

問4 第4段落の内容に関して、個々の選択肢が、本文中の記述に該当するか否かを判断する必要がある。良問である。

問5 長めのドイツ語文での選択肢と、第5段落の内容との整合性を問い、やや高度な読解力と語彙力を必要とする問題である。

問6 テキスト全体の大意を選ばせる問題である。B1リストに記載されているrealistischが入っているため、①の難度がやや高い。その他の選択肢は分かりやすく、関連する内容の整合性を照合出来れば、解答できる。

問7 日本語の選択肢から答えを1つ選ばせる問題である。選択肢の内容が本文中に明記されているか、さらにそれが一般的に知られている事実かを適切に読み取る必要がある。よく練られた問題であるが、個人の意見と一般的に認められる事実をドイツ語テキストの中で読み分けるのは、入試問題として要求が高い。

### 3 ま と め

今年度の共通テスト(1)「ドイツ語」は、平均点が昨年度と比べて、やや下がっている。出題形式が過去の出題の傾向と大きく変わった設問もあり、また総語数も増え、読み込むための所要時間を考慮しての、解答時間配分が過年度と比べると難しかったと思料される。その一方で、文字から情報と状況を読み取らせるオーソドックスな出題の中にも、登場人物の心情を推し量る、あるいは空想物語を読むといった、ドイツ語圏の「国語」的な力を問われる出題も織り交ぜられていることが特徴であった。子供の複言語習得をテーマとした問題から、現代社会に垣間見られる諸相について深く考えることに対する挑戦心をくすぐるなど、時代に沿った出題が工夫されており、今後も英語に偏りすぎない外国語教育が展開されていくためにも、共通テストでの「ドイツ語」の存続が強く希望される場所である。

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。  
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。  
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

今年度の問題においては問題構成を従来から大きく変えている。昨年度までは会話が第4問～第6問の大問3問、読解が第7問であったが、今年度は会話文問題を大問2問にまとめ、読解についても大問を2問設けた。会話文を素材とした第4問、第5問では会話全体の流れ、発話の意図、要点の正確な把握などを多角的に問うことを目指し、読解では第6問、第7問で大意把握や精読など、文章の種類に応じた多様な読みの能力を測ることを意図した。このほかにも問題形式を変更した部分がある。配点は、会話文問題全体で70点、読解問題で計60点と、昨年度までの配点を踏襲している。詳細については各問題の報告を参照されたい。

多様な能力を測ることを意図し、また実際のコミュニケーションを想定した問題を増やしたこともあり、全体として語数が増加した。この点については日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という。）から指摘があった。さらに、高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からも受験者にとって負担増になったという指摘を頂いた。

使用語彙に関しては、例年同様に、高等学校3年間で学ぶ範囲を中心とし、それを超えると考えられるものには注や平易な言い換えなどを利用し、受験者への過度の負担をできる限り回避するよう配慮した。熟語表現や文法項目についても、高等学校3年間の学習を踏まえて理解できるものを中心とするよう留意した。しかしながらこの点について、教科担当教員からは、口語表現の理解を踏まえた問題が複数含まれており、受験者の学習環境によっては難度が高かったであろうという指摘を頂いた。ドイツ語教育部会からは、難度の高い語の理解を問う設問が複数含まれていたことを指摘された。

平均点は119.25点（100点満点換算値：59.62点）と例年より下がった。総語数が増えたことも一因であろう。難度が比較的高い語彙や表現の理解を問う問題が含まれていたことも影響したかもしれない。「コミュニケーション能力」の向上には語彙の拡大が不可欠であるが、語数や表現の難易度等についての指摘を真摯に受け止め、次回では適切なレベルとすべく検討したい。

設問構成と出題形式については、「思考力、判断力、表現力等」を含め、ドイツ語を用いたコミュニケーションで問われる多様な能力を測るという目的に沿って検討を重ね決定している。問題の質についてはドイツ語教育部会からも「昨年度より難度は上がっているが、今年度は登場人物の心情を読む問題や、表現の言い換えなど、実際のコミュニケーションで必要とされる知識やスキルも問われており、時代に即した工夫がされている」という評価を頂いた。今後はレベルの適正化を図り

たい。

問題構成は、従来の大問7題の形式を踏襲しているが、以上で述べたとおり構成を大きく変更した部分がある。

発音・文法	第1問～第3問	20問	70点
会話・コミュニケーション	第4問～第5問	14問	70点
読解	第6問～第7問	11問	60点

第1問 第1問は主として単語レベルでの基礎的な発音、文法、語彙の知識を問う問題である。問1～問3は発音に関する問題である。問3は、昨年度同様、選択肢をペアにし、アクセントの位置が比較的単純なドイツ語の特性を踏まえて、問題作成上の工夫を行った。問4、問5は語形変化の問題である。問6は名詞の複数形を問う問題とした。問7は、日常的に使用頻度の高い名詞の意味に関する知識を問う問題である。教科担当教員からはおおむね基本的な知見を問うものとして評価をされた。日本独文学会ドイツ語教育部会からは、語彙レベルではやや難度が高いと指摘された箇所もあったが、「重要な基本事項の理解度を確認する上で、総じてよく練られた問題である」との評価を得ている。

第2問 第2問は実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な語彙の知識を問う問題である。文法の知識を正確に運用できるかどうかを識別するため、基本的なものからやや難度が高いものまでを出題し、難易度のバランスを工夫した。教科担当教員からは「広範囲から出題され、豊富な学習量が要求されている」とのコメントを得たが、肯定的な評価として受け止めている。ドイツ語教育部会から全般に良問であるという評価を受けた。

第3問 第3問は与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。昨年度までは、選択肢全ての語句を用いて文を完成させる形式だったが、今年度は、6つの選択肢のうち5つのみを用いる形を採用し、語彙選択の力も焦点化して問うものにした。大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の趣旨に鑑み、ドイツ語運用能力を総合的に問うのが目的である。各問題のテーマは、日常的な話題から選び、基本的な語彙を用いた自然で日常的なドイツ語表現になるように配慮した。教科担当教員からは、今回の問題形式の変更により難度が上がったことが指摘されたが、ドイツ語教育部会からは当該形式やテーマに関して工夫を評価され、良問とのコメントも得ている。

第4問 共通テストの第4問は、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の第4問と第5問を統合する形で作成した。

センター試験第4問の問1、問2は比較的短い対話で構成され、日常会話での決まり文句、数的表現を問う問題としていた。問3は日常場面で目にするテキストと基本的語彙の把握、問4では対話の自然な流れに沿って文脈を理解する能力を問うていた。またセンター試験の第5問はやや長い対話を問題文とし、問1は会話の慣用表現、問2は会話の内容の理解、問3は会話から話者の心情を読み取る問い、問4は会話全体の内容把握を問う問題としていた。第4問、第5問ともに問題数は4問、配点20点であった。

今回の共通テストの第4問は、上記センター試験第4問・第5問を合わせて問題数8問、配点40点とした。対話文は、少年Maxを軸に、それぞれ異なる4つの場面で3人を相手（Timo, Frau Jakobs, Vater）として交わされる、一連の会話とした。問1は会話の内容と数的表現を問う問題、問2は日常会話と基本的語彙の把握、問3は話者の心情を読み取る問い、問4は文脈を理解し日常会話での決まり文句を選ぶ問題である。問5は発言のもととなっている話者の心情を

読み取る問い、問6は「何を語り、何を語らなかったか」という情報の正確な読み取りと、発話についての話者の判断を読み取る新問題とした。問7は対話の自然な流れに沿って文脈を理解する問い、問8は対話文全体の内容把握を踏まえた父のアドバイスの内容を問う問題とした。

細切れの設問ではなく、一連の対話とすることにより、「日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する」場面設定を行った。昨年度のセンター試験での得点率が第4問、第5問ともに8割台前半だったので、識別力を上げるよう調整し、共通テスト第4問の得点率は6割台後半となり難易度は少々上がった。問1、問6は「良問」との評価を得たが、問4は結果として難問となったようである。今後はドイツ語教育部会や高校からの評価を踏まえて、よりよい設問の仕方などに工夫を加えていきたい。

第5問 「設問数、配点及び2種類の異なるタイプのテキストで構成されている点に加え、テキストの分量も昨年度の第6問とほぼ同等である」とドイツ語教育部会から御指摘があったとおり、テキストを挟む一連の会話を本文としたセンター試験の第6問を、同形式で共通テストの第5問とした。設問数6、配点30点ともに変更はない。ペットを飼うことを検討する会話で、ドイツ語教育部会からは「会話の内容や流れは、ドイツ語圏での実生活を意識している点が目を引く」とのコメントを頂いた。インターネット情報と会話文の話題を対応させ、理解を問う設問とした。

問1はsich etwas leistenを含むインターネット情報3が、会話のどの部分と対応しているのかを問う問題である。問2は話題転換に対応した相関的接続詞を問う問題。問3は文脈を踏まえた文意の把握。問4は語句の言い換え。問5と問6は、形式は異なるものの、テキスト及び会話文全体の内容把握を問う問題とした。得点率は昨年度第6問の7割程度から今年度第5問の5割半ばとかなり下がったが、反面、識別力は上昇した。ドイツ語教育部会からは問4と問6について「良問」との評価を頂いたが、高校でのドイツ語教育の成果を生かせる設問となるよう今後とも努力したい。

第6問 読解問題としては前回まで1つの長文に基づいた問題を出題していたが、今回は形式の異なる2つの問題（第6問、第7問）を設け、CEFR準拠外国語能力試験などで問われる現実のコミュニケーションで必要になる読解力要素を中心に、多角的に受験者のドイツ語力を測ることを目的とした。両方の問題を通じて、テキストの細部に記された部分的内容を正確に読み取り、それを組み合わせる能力を測ることができたのではないかと考えている。

第6問の主眼は全体の理解（Globalverständnis）に置いている。問題文はやや短めのものとし、設問文には日本語のみを用いた。ドイツ語の読解授業で教材になることが多いメルヘンの形式を持つテキストを問題文とした。テキストの内容を的確に理解し、それに基づいて全体のストーリーの自然な流れをつかむ能力が重要になる問題である。

テキストは基本的に過去形で語られている。教科担当教員からは過去形によるテキストが近年授業で扱われることが減ってきていること、ドイツ語教育部会からは日常生活に直接関連したものでないことから難度が高いというコメントがあった。ストーリーの全体像の理解度を測ることは必要であると考えているが、今後は使用語彙等を検討し難易度の更なる適正化に努めたい。

問1についてはドイツ語教育部会からはテキストの内容を理解した上で選択肢を並び替える問題であるため難度が高いという評価があった。実際に正答率は高くなかったが、まずテキストのストーリーを大づかみに理解し、それに基づいて細部を理解する力を測るため、語られる内容を時系列に沿って並べさせる問題を意図的に問1として配置している。問2以降は全体のストーリーの枝葉となる部分の理解についての問題だが、ストーリー展開が把握できていれ

ば選択肢からの情報と照合することで解答できる問題である。

第7問 第7問の主眼は細部の理解 (Detailverständnis) に置いた。問題文はやや長めである。設問文にはドイツ語を多く用い、一つの内容をドイツ語の複数の言い方で表現できる能力も測ることを狙っている。ドイツ在住の日本人を含めた一家の言語との関わりについて記したテキストを問題文とした。現実には起こり得る問題について取り上げた論述文であり、第6問とは異なる読解力を測ろうとした。テキストについては教科担当教員から難しい語彙や表現が避けられ、さほど難しくはないという評価を得ている。ドイツ語教育部会からは「ドイツ語学習の意義にも深く関わる興味深いテキストである」というコメントがあった。

問題については教科担当教員からさほど難しくないと評価を得ている。他方、ドイツ語教育部会からは問2について高い語彙力が、問5について高い読解力と語彙力が必要であるという評価が出ている。もっとも、どちらも正答率が6割台半ばを超えており、受験者には比較的解答しやすかったようである。問7についてはドイツ語教育部会から個人の意見と一般的事実の読み分けを求めるのは要求が高いとコメントされているが、教科担当教員からは「本文をしっかり読んでいれば、迷う要素は少ない」という評価を得ている。この問題は設問を日本語にしており、それも解答上の一つの手がかりとして位置づけている。

### 3 ま と め

現行の高等学校学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、当該言語に応じた明確な指導目標が存在しない中、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成部会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、良問の作成に向けてさらに努力を続けていく所存である。なお、過去10年間の受験者数・平均点(100点満点換算)の推移は以下のとおりである。

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
受験者数	125	123	147	135	147	116	109	118	116	109
平均点	72.05	75.77	77.68	72.39	65.46	64.33	68.42	76.10	73.95	59.62